
n e o w o r l d

h i s a

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

neo world

【コード】

N9789A

【作者名】

hisa

【あらすじ】

記憶を失くした女性と出逢った譲は、瞬間にして彼女へ心を奪われた。NEWORLDを譲る視点から綴った話です。

neoworld

(前書き)

この話はNEW WORLDと繋がっています。どちらから読んで頂いても話は分かるようになっていきます。

世界が動き出した様な気がした。

いや、気じゃなく実際にあの日から僕の人生は確かに変わったのだ。

突然降り出した霧雨の中いつまでも佇む彼女を見つけた。僕はマンションの高層階の自室の窓を開け広げ、眼下に広がる闇に包まれた街並みを何となく眺めていた。闇夜の魔力を押し退ける様な町中のネオンは至る所で煌めき、人々を不眠に変えてしまう様な錯覚に捕らわれる中、彼女だけがその場に不釣り合いな様に思えた。初めは誰かと待ち合わせをしているのだろうか、その程度にしか思わなく視界の隅に何となく措いていた。

人差し指程度の大きさの人々が忙しなく行き交う中、いつまで経っても彼女はそこを動く気配を見せなかった。距離があるので容姿や年齢などは見て取ることは出来なかったが、なぜか小さい肩が不安気に見えてしまった。

気が付けば、街並みを見下ろしていただけの筈の僕は、視界の隅に措いていた彼女に視線を奪われていた。

こんな遠目で姿形のはつきりしない人なのに　なぜか、その後ろ姿に胸を締め付けられる想いがした。

居ても経ってもいられずに、気が付けば部屋を飛び出していた。

こんな勢いで走るのは久方ぶりで、エレベーターが到着するのが待ち切れず、非常階段を疾走した僕は階下に着く頃には息が上がっていた。

そして、あの場所で彼女を見つけた。

霧雨の降る中、ぼんやりと自分の手を見つめ何かを振り払うように彼女は挙げていた手を下ろした。

その動作が想像以上に優雅でいてまた、儂くて、僕は何も考えられなくなった。霧雨に濡れた前髪が額に張り付いている様が儂さの

中に妖艶ささえ漂わせて、僕の視線を捉えて離さなかった。

強力な引力で引き込まれる僕には抗う術など持ち合わせていなかったのだ。言葉は陳腐だかあまりの美しさとその雰囲気にてられてしまった。高層マンションから視線を奪った彼女は、出逢うべくして出逢ったのかもしれない。

その時は、締め付けられる様な胸で何かを考える余裕なんてなかったけれども。

この出逢いを逃すものかと思っただかどうか。僕は自然と彼女の前に歩を進めていた。緊張のあまりにどんな顔をして話し掛けたのかはもう覚えていないけれど、格好良く決まっていなのは分かり切っている。

過去の未だに薄れることのない情景に心を馳せていた僕は、仕事場のデスクの前に座り、パソコンの画面がスクリーンセイバーになっっていて我に返ったのだった。

職場を見渡せば窓の外はとっぷりと日が暮れて社内に残っている人も少なくなっていた。

今日も彼女はあのマンションの一室で僕の帰りを待っていてくれるだろうか。

必ず帰宅前に細波の様に押し寄せる不安。あの日から居座っている彼女だが、僕たちの間には何の約束もなく、彼女を束縛して繋ぎとめるしがらみもない。だからこそ、毎日一度は不安に駆られる。

こんなに相手の事を思ったことはかつて一度もなかった。だからこそ、一緒にいられる今が幸せで、そして震える程に不安を駆り立てる。

「わたしの名前は…あなたが決めて」

とんでもない事を彼女は言っただけのものだ。

余りの突拍子のない発言に、僕の思考は一瞬フリーズした。後々

なぜ彼女がそんな事を言ったのか理解はしたが、その時は彼女なり
の僕への拒否かと思っただけだ。

彼女はすべての記憶をなくしていた。なぜ記憶をなくしたのか、
なにも分からないと言った。そんな彼女に惹かれたのは偶然か、必
然か、はたまた奇跡か

そして僕は真剣に彼女の名前を考えた。彼女にぴたりと嵌まる彼
女の為の名前。僕だけが語り掛ける事を許してもらおう為。

「七輝：なんてどうかかな？」

少し照れくさかった。けど、彼女は嬉しそうにはにかんだ。そん
な様子にもう一度彼女に惹き込まれてしまったのは言うまでもない。
彼女の自ら知らずに溢れているであろう輝き。そんな響きがぴっ
たりだと我ながら思った。

あれから、かれこれ一年と一カ月と八日経つ。

未だに彼女への想いは途絶えることなく溢れて、愛しくて愛しく
て堪らない。だから、不安と背中合わせの日々を多くの幸せと、多
くの不安を抱いて過ごしている。きっと彼女はこんなに思っている
事なんて微塵も気が付いていないのだろう。

何度想いを伝えようと思っただろう

何度彼女を抱きしめようとしただろう

何度彼女を

だけど、いつも寸でのところ自分で自分を抑えてしまう。彼女の気持
ちを知るのが怖い。彼女を失うことを考えるとそれは多大なる恐怖
を僕の許へ運んで来るのだ。愛しすぎて、もう手離す事なんか考え
られない…

彼女はいつも物憂げに、小さく微笑む。

彼女はいつも大きな瞳で、懸命に語り掛ける。

彼女はいつも

僕は思う。傍にいてくれるだけで、こんな幸せはないのだと。

この目で見詰め、この目に触れさせて、この目で愛させて。ひっそりと想う事をどうか許して下さい。

まだ、想いを告げる勇氣は、彼女を失う恐怖に打ち勝つことは出来ないけれど、いつか彼女の幸せだけを想える様になったら伝えよう。この焦がれる様な迸る七輝への氣持ちを

暗くなった夜空の下、いつもの帰り道。

想うのはいつも変わらず、愛しい彼女の事。

そして夜空の瞬く星に願うは彼女との幸せな日々。

永遠なんて言葉は実在しないのは分かっているから、せめてもう少し一緒にいる時間を下さい。僕は祈りに似た想いを苦しい胸に抱き、彼女の許へ帰る

(後書き)

NEW WORLDを譲る視点から書きました。

お互いの想いの擦れ違いと、お互いへの同じ想いを両サイドから見
てもらえたらと思います。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

感想や評価ありましたら宜しくお願い致します。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9789a/>

neoworld

2009年6月21日22時55分発行